【ＮＨＫ高松放送局長賞】

「はぁ？」とは言わせない

高松市立太田中学校　一年　竹林優芯

僕の祖母は島根県の田舎で一人暮らしをしています。新型コロナウィルスの影響もありしばらく機会がなかったのですが、数年ぶりに今年は家族全員で祖母のもとを訪れ、数日間たい在しました。久々に会った祖母は少しやせて見えましたが、ニコニコ笑顔は健在でした。その笑顔を見て、僕と姉は２人で目を合わせ、思わずニコッと笑ってしまいました。祖母は七十六歳になった今でも何キロも歩いて買い物に出かけたりもしているらしいです。ただ、僕ら家族の会話に入らずにボ～っとしていることや、呼んでも返事をしないことが目立ちました。

「認知症」という言葉が、僕ら家族の中で話題に上がりました。

姉と祖母と僕の三人で、家のすぐ近くにある海に向かいました。浜辺に着くと、祖母が僕に

「ゆう君、ここでみーちゃんとばあばで一緒に貝殻集めていたの覚えている？」

と聞いてきたので僕は

「もちろんだよ。おばあちゃん。」

と言うと、祖母は「はぁ？」と聞いてきました。先ほど自分で聞いてきたはずなのに、すぐに忘れてしまうようになっているのではないかと思うと、ショックでした。その後、皆で買い物に出かけることになり、僕は祖母が心配だったので一緒に行動することにしました。しかし、祖母におかしな行動は全くなく買い物はすすみ、最後に祖母と僕はレジに行きました。するといきなり祖母が、レジ横の台の上を指差したのです。指の先に目を向けると、そこには「耳マーク」というものが描かれていました。「かしこまりました。」と言った店員の優し

い対応により、祖母は一人で問題なく会計を無事に終えることができました。

三年前に祖母は「突発性難聴」をいう病気になっていました。急に片耳が聞こえなくなってしまう原因不明の病気らしいです。数日から二週間程の治療で治る場合があるそうですが、難しい場合もあるとのことでした。治療したはずの祖母の左耳は、もうほとんど聞こえなくなっていたのでした。家族の会話への不参加や、呼んでも返事をしないことのつじつまが合いました。浜辺で「はぁ？」と祖母に言われた時に抱いた自分の感情を思い出して、少し恥ずかしくなりました。

今年は、島根から香川に帰ってくる際に、二週間程のたい在予定で祖母を連れてきていました。短い期間でしたが、祖母は僕ら家族と楽しそうに過ごしていました。聞こえるように大きな声ではっきりと話すことで、家族との会話が充実していました。ただ、買い物に出かけた先のレジ横には「耳マーク」はなかったのです。支払い時の機械的な対応の店員の声が聞き取れず、祖母は何度も「はぁ？」と聞いていました。最終的に僕が代わりに支払いを行ったのですが、島根での買い物時を思い出して、妙な悔しさが僕の中にこみあげてきていました。

家に帰ってから、僕は祖母に耳が不自由だと何が困るのかを聞いてみました。すると祖母は

「大人数で話していると何をしゃべっているかわからないの。車の音が聞こえなくて、車にひかれそうになったこともあってね。何より耳マークみたいなものがないと生活が大変なの。」

と言いました。僕は祖母の気持ちに応えて

「おばあちゃんは耳が聞こえなくて辛くないの？」

と聞いたので祖母は

「住んでいる田舎はお年寄りが多くて耳が不自由な人が沢山居るから、耳マークも色々なところにあって助かっているの。でもゆう君が

住んでいる所では耳マークが少ないから、ばあばみたいなお年寄りや障害者に優しくないと思うんだよねぇ。障害者やお年寄りは我慢するしかない。ばあばはね、こう思うの。人が人の心を読みきれないのは当然。障害者とお年寄りも元気な人の心は読み切れない。だから、政府だって、障害者とお年寄りの思っていることが理解できていない。例え政府が障害者やお年寄りへの取り組みが出来ていると思っていても、実際には思ったほど出来ていない。だって、ばあばがそう感じているのだから。」

祖母の話を聞いて僕は思わず、祖母をギュッと抱きしめていました。

耳が不自由な人は、見た目で判断されることがないため、健常者と同じような扱いを受けてしまいます。都会は田舎と比べて物は何でも揃っていたとしても、優しさが整っていないのかもしれません。まずは「耳マーク」の普及などの環境整備から始めるべきですし耳が不自由かもしれないという前提で、互いに人と向き合うことが大切なのだと思います。もう「はぁ？」とは言わせないために。